

東大見学会及び企業訪問がついに終わった。という訳で感想文を書いている。思えば、中間考査前から始まった準備も昨日のここのように思える。そのような準備段階において、私がとても驚いたことが二つある。

一つ目は、全部自分で動くという自主自律の精神である。アポイントメント取りから二日間の計画まで、ほとんどが生徒主導で行われた。中学生のときまでは先生の言われた事を行い、先生によってつくられた計画に沿った校外活動を行っていた。しかし二高は全く違っていた。私はその違いに、大いに感動した。中学生の頃の自分は、毎年学級委員を経験していたが、自分の思いつく、学校を学年をより良くする活動において、いろいろと制限されることもあった。何か意見を発案しても、全否定されることさえもあった。しかし二高は違う。生徒の考えを尊重し、生徒を第一に考える学校だと思った。だから、自主自律の精神が根付いているのだと改めて感じたのである。

二つ目は、準備として行われたがイダンスの回数の少なさである。また中学、小学時代に戻るが、当時は半年ほど準備に時間を費やしていた。しかし二高では、およそ一ヶ月半と行ったところだろうか。計七回だけのイダンス。私は、これもまた自主自律の精神を表すものだと思う。少ない回数で、かつ忙しい中、当日のことをどれだけ自分で計画できるか。これは二高生だからこそできるものの一つかもしれない。正直たった七回のイダンスで当日うまくいくのだろうかという思いもあったが、自分で必要な情報をかき集めたため、うまくいった。改めて自分から動く、あるいは何かをすることの大切さを感じた。

さて、このようにして準備段階の日々を振り返った訳だが、そろそろ本題に移ろうと思う。まず最初に、私にはどうしてもなりた職業、いや、なる運命にある職業がある。それは公務員である。君の夢について語れと言われれば、何時間でも語れてしまうため遠慮したいところだが、今回の行事の主旨は紛れもなく自らの将来設計であるため、語ろうと思う。まず私は、言語が好きだ。母は中国人で幼い頃から中国語を聞いていたため、大体何を言っているのかは分かるように今はなった。たまに中国へ帰省し、現地の人と話すことは当たり前のようであった。会話の中で私は、自分の話した言葉が相手に伝わる感動を知った。その感動が、今の私の将来設計に大きく関係しているのかもしれない。

小学生になって私は、英語を習いはじめた。文法がどうのこうのではなく、会話文を音読し、それを話せるようになることから始まった。小学六年生頃になると、英語を話し、会話をしたいという一心で、知り合いのいるアメリカのニューヨークによく行った。ここでもあの感動は残っていた。道を訪ねるとき、食べ物を注文するときなど、日常の当たり前の一面で、私はワクワク、ドキドキした。このような幼少時代を経て、中学生になると、具体的な将来設計が始まった。小学4年生の2分の1成人式では、総理大臣になりたいと破天荒なことを言っていたのを今でもよく覚えている。中学生になると、国連で働きたいと考えていた。これは、本気でなりたと思った最初の夢だった言語への興味、国

際社会や文化への関心をもっていたため、この二つを生かせる職業には何があるだろうと考えた時に、パッと浮かんだのが、国連、外務省だった。さらにダイレクトフォースや、外務省訪問などを加味して今、公務員になりたいという夢に至ったのである。

そう、私が今回の行事で言うまでもなく心に一番残ったのは、ダイレクトフォースと外務省訪問である。それらは私の将来設計において新たな視点を与えてくれた。また、もともと外務省に行ってみたかったため、とても嬉しかった。まず、ダイレクトフォースについて振り返りたいと思う。ダイレクトフォースは一日目に行われた行事だが私に、いきなりミッションが訪れる。お礼の言葉である。偉い方々の前でミスはできないとドキドキしていた。しかし、前日に大体どのようなことを言うか骨格づくりをしていたため、焦らず、はっきりとお礼の気持ちを伝えられた。私にチャンスを与えてくれた先生方に、感謝している。

さて、私が学んだことに入るが、まさに人生における財産である。まず私は、社長を歴任されていた方々と会談するのはもう二度とないだろうと思い、社長という立場、考えなど、社長の方だから聞ける意見を聞こうと決めた。そして同じ質問をそれぞれの方に聞き、様々な意見を得られた。まず人材育成である。どの元社長さん方も人材育成を真っ先に挙げていた。主体性のある人材。give a fishではなく、teach how to get a fishが大切だとおっしゃる方がいた。やり方を教え、仕事を自分で考えさせ、自分でやらせることで主体性を身につけさせることができるのだそうだ。なんとなく私は、山本五十六の言った「やってみせ、言って聞かせて、させてみて」の一節が似ているように思えた。またある方は、人材育成において、仕事がよくできる社員にはより高いハードルの仕事をクリアさせ、仕事あまりできない社員には低いハードルをクリアさせるのだとか。仕事ができる社員にはどんどんさせ、重要な役職を任せたり、あまりできない社員には、簡単な仕事を徐々に難しくしていき、成長させたりしたそうである。さらにある方は、社長は孤独だとおっしゃった。会社の最終意志決定を行う役職で、それ以上に権力のある機関はないからである。

また、社員や株主への環境づくりなど、広い視野をもって会社のために行動しなければならないところも、大変なのだそうだ。また、私は人生の先輩である講師の方々から人生にまつわるお話をたくさん伝えられた。それは、社会というものは大海原で、我々が小舟であり、今私たちは大海原で何が起きているかを知る必要があるのだということだ。

それができなければ、右にも左にも、前にも後ろにも進むことができない。だから、小舟を操縦する私たちは大海原の現状を把握することが大切なのである。また、現在の急速な変化を遂げる社会に対応するために、まずその原因を知ろうということで、三つの例を挙げられた。グローバリゼーション、技術の変化 Information&Communication Technology、少子高齢である。技術の変化によって、未来では、今ある職業の半分がなくなり、機械によって行われるだろうと推測されている。さらに、高校時代ですべきことが四つあるらしく、夢中になっていることを徹底して究めることと、五感に感じることをたくさんする

こと、常に物事に対して疑問を持ち、知識をたくさん得ること、そして、日本語と英語だけでなく他の言語も多く学ぶことだそう。ここまでダイレクトフォースで学んだことを述べてきたが、そろそろ外務省で学んだことについても述べたいと思う。

そもそも私は、外務省訪問の班長としてまた一步成長したと思う。中学校三年の三月以来、久しぶりにリーダーシップを発揮する時がきた。アポ取りを始めとした何から何まで、最善の準備をしてうまくリーダーシップを発揮できたと思う。さて、外務省では、記者会見室の見学や会議場で質疑応答をした。日本のエネルギー外交、竹島問題、日本の安全保障政策についてのパンフレットをいただき、理解を深められた。また、国連で働くには、外務省職員つまり国家公務員となって、外務省から国連へ派遣されるのが一番速いということがわかった。

最後になるが、一生の財産のような経験をし、ちゃっかり楽しい思い出を作ることのできたので良かった。新しい仲間を作ることができて良かった。二高に入学して良かった。必ず二高での経験を生かし、ビッグな人間になってみせると決めた。

。